



## 絵本の読みあい遊びが子どもの言動に及ぼす効果について：市内A幼稚園における予備的検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片桐, 正敏, 長谷川, 茉奈, 福本, 那奈, 石川, 由美子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00006857">https://doi.org/10.32150/00006857</a>

## 絵本の読みあい遊びが子どもの言動に及ぼす効果について

— 市内A幼稚園における予備的検討 —

片桐 正敏・長谷川茉奈\*・福本 那奈\*\*・石川由美子\*\*\*

北海道教育大学旭川校 特別支援教育分野 臨床発達心理学研究室

\*旭川市役所

\*\*旭川市立神楽岡小学校

\*\*\*宇都宮大学教育学部

## The Effect on Behavior of Children in Shared Book Reading Play

— Pilot Study in the A Kindergarten —

KATAGIRI Masatoshi, HASEGAWA Mana\*, FUKUMOTO Nana\*\* and ISHIKAWA Yumiko\*\*\*

Department of Special Education, Asahikawa Campus, Hokkaido University of Education

\*Asahikawa City Office

\*\*Asahikawa Kaguraoka Elementary School

\*\*\*Department of Education, Utsunomiya University

### 概 要

近年、幼児教育の実践において、絵本は欠かせない教材の一つであろう。絵本についてはこれまで様々な研究がされてきており、近年ではコミュニケーションツールとして絵本が見直されている。本研究では、「絵本の読みあい遊び」の実践（石川ら、2018）をA幼稚園で実施し、子どもの絵本に対する向き合い方の変化を検討した。その結果、絵本に関する発話量および発話内容が大きく増えたほか、子どもの意見も見られるようになった。それに伴い、絵本に対する積極的な行動が増加し、対人へのスキンシップ行動も回を追うごとに増加が見られた。これらの量的な評価だけではなく、質的にも肯定的な変化が認められた。少ない回数の実践にもかかわらず、「絵本の読みあい遊び」は子どもの絵本に対する行動を積極的にさせ、より関心を高める方向へと変化させたことが示唆された。

## 1. 問題と目的

絵本は幼児教育の現場において必須のツールといってもよいだろう。我が国において絵本の読み聞かせを全く行っていない幼稚園、保育園は皆無と言い切っても良いくらいである。文部科学省(2018)も第四次『子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画』において、保育園および幼稚園、さらには家庭での読み聞かせを強く推進している。ところが、家庭においては必ずしも絵本を読み聞かせしていない実態も垣間見える。古相・岡本(2017)が行った保育園・幼稚園に通う乳幼児の家庭における絵本読み聞かせの実態を調査した研究では、「ご家庭でお子さんに絵本を読んであげていますか」という項目に対し、82%が「よむ」と回答している。この結果は別な見方をすると2割弱の家庭が絵本を読んでいないことになる。公文教育研究会が2015年に行った「0～3歳児と母親に関する意識と実態調査」では、0～3歳児の第一子がいる母親1,000人に子どもが利用しているツールを尋ねたところ「絵本」と回答した割合が81.8%であった。さらに子どもが過ごしている時間については「読み聞かせ」の時間を「増やしたい」または「少し増やしたい」と答えた母親が71.8%おり、半数以上の母親がDVD鑑賞や一人遊びの時間を「減らしたい」「少し減らしたい」と考えていることが示された。このアンケートでは読み聞かせを増やしたいと回答した母親に「読み聞かせの目的」を尋ねているが、「子どもとコミュニケーションをしたい」(63.7%)という回答がもっとも多く得られた。裏を返すと、両親ともにコミュニケーションをとる時間を作るのに苦慮しているようである。子どもに関わる時間が取れず、ついテレビやDVDを見せてしまったり、一人遊びをさせてしまっている実態も少なからず窺える。

これまでの研究においても「空想したり親子のふれあいをする」という親子間での読み聞かせの意義が指摘されており、感情や物語体験の共有の必要性が示唆されている(秋田・無藤, 1996)。

特に絵本を介した母子相互作用では、母親の応答的な反応が生じやすい(佐藤, 2017)。こうした点を鑑みると、親子間で読まれている絵本は、知育教材でもなければ、道徳教材でもなく、はたまた芸術作品として鑑賞するものでもなく、「親子間のコミュニケーションツール」なのである。

そうは言っても、文字や言葉の習得を期待して養育者が絵本の読み聞かせを行っている現状もある(秋田・無藤, 1996; 諸井, 2011)。読み聞かせによる子どもへの発達に及ぼす効果については多くの研究が指摘している。新しい語彙を習得する際、子どもはただ文字を見るだけでなく、視覚的なヒントがあると覚えやすくなることから、絵本には絵と文に加えストーリーがあるため、言葉と文字の習得、文脈理解に効果的である(Strouse, Nyhout & Ganea, 2018)。だが、Phillips, Norris and Anderson (2008)は、実際にはそれほど期待されるほど読字能力に対する効果がないことを指摘している。ただ、彼女らは効果的なポイントも指摘しており、実際に絵に明示的に注意を向けさせる読み方が重要であるとしている(Phillips et al., 2008)。Masataka (2014)は、母子でデジタル絵本を見たあと、改めて親子で絵本を読んだ時の子どもの読み取り能力が、どちらも紙の絵本を読んだ場合と比べ高かった。その理由としてMasatakaは、デジタル絵本ではナレーターの作用、強調したい文字のハイライト作用があり、それが子どもたちの記憶に残った可能性を指摘している。

絵本をコミュニケーションツールと位置づけ、型通りの「絵本の読み聞かせ」とは異なったスタイルで絵本を読む方法がある。それが「絵本の読みあい」である。村中(2005)は、「絵本の読みあい」は、互いにものがたり世界の不思議に立ち向かう対等な関係づくりであるとし、絵本と人が、場と共に育ち合っていく関係、と述べている。「読み聞かせ」では、発声、表現力といった読み手の表現方法や、めくり方、持ち方などの形式や方法に一定の型があり、それらにそった読み方を行う(松村・森・宇陀, 2015)。だが、実際保護者が

子どもに対して絵本を読む場合、決められた読み聞かせの型を守って読むことはなく、子どもの理解力に応じて、子どもの意を汲み取るような関わりを通して絵本を読むことが多いだろう。こうした「共有型」の態度で絵本を読むと、子どもの主体的な発言や探索行為が増加するなど（斎藤・内田，2013），絵本を通じた間主観的なやり取りは子どもの発達をも促すことが示唆されている。

一方、集団における絵本と保育者-幼児との関係では、コミュニケーションツールとしての読み方ではなく、まさに「読み」「聞かせ」る読み方になる。幼児教育の現場では、様々な子どもがいる。理解力や想像力、語彙力にも幼児によっては個人差があり、そもそも絵本に慣れ親しんでいない幼児もいるはずである。そういった状況で淡々と読むやり方では、当然のことながら理解力に差が出てくるのも頷ける。一方、絵本の読みあいは、重要な箇所やセリフを強調して読んだり、子どもの理解力に応じて緩急をつけたり、問いかけながら読んだりしている。実は、こうした読み方はMasataka（2014）が指摘したデジタル絵本にある特徴そのものと言える。

これまでの議論をまとめると、「絵本の読みあい」は、読み聞かせよりも話の理解を促進するようだが、実際は母子での読みあいなど少人数で行われている。読みあいの効果については、特に集団でのコミュニケーションツールとしての絵本の効果についての研究は少ない。石川ら（2018）は、

保育の集団場面において、「絵本の読みあい→遊び→絵本の読みあい」という構造の「絵本の読みあい遊び」の実践を行っている（図1）。石川は、この読みあい遊びを通して、子どもは絵本の内容を楽しみながら体験的に理解でき、理解言語や概念理解の発達を促すとし、それが「子どもの関係の発達と情動や認知の発達に影響する」としている。だが、読みあい遊びを通して子どもの絵本への向き合い方も変化するのか、ということについては不明な点も多い。

そこで本研究では、石川が実践している「絵本の読みあい遊び」をA幼稚園の保育に取り入れ、読みあい場面での子どもの発言・指差しなどの言動を分析し、読みあい遊びを行うことで子どもの絵本に対する向き合い方は変わるのか、A幼稚園の実践から予備的な検討を行うこととする。近年、子どもの本離れや子ども同士や親子間のコミュニケーションの希薄化が問題視されており、教育現場では子どもの主体性の伸ばし方が検討されている。本研究の仮説として、聞き手の主体的な発言を促し、読み手と聞き手が一つの空間で楽しい時間を共有し、遊びを通じた体験的な理解をすることで、読み手と聞き手のコミュニケーションを深め、絵本を介した楽しい思い出が、子どもたちの絵本への興味に繋がる、といった肯定的な般化が認められると考えられる。

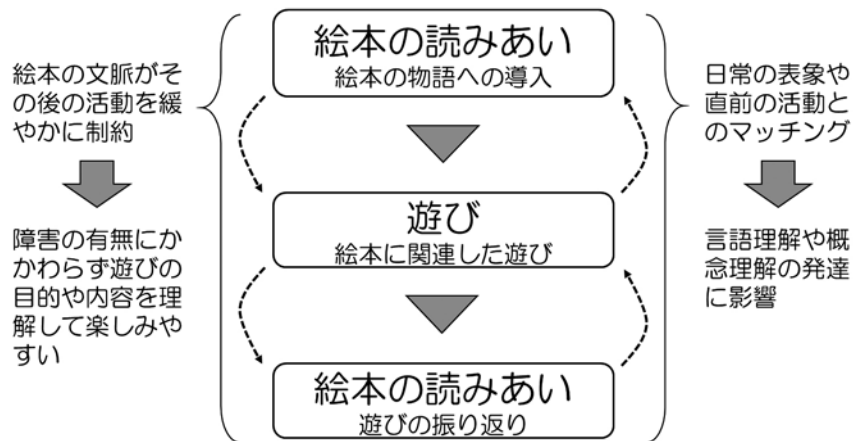


図1 絵本の読みあい遊びの構造の模式図（石川ら，2018）

表1 aクラスでの読みあい遊びで使用した絵本と行った遊び

	使用した絵本		遊び
	最初の絵本	おわりの絵本	
1回目	ばおちゃんのなつまつり（なかがわみちこ作/絵, PHP研究所）	わにわにのおでかけ（小風さち文, 山口マオ絵, 福音館書店）	チョコバナナ, きんぎょすくい遊び（割りばし, 画用紙, 折り紙, 新聞紙を使った製作遊び）
2回目	あきはいろいろ（五味太郎作/絵, 小学館）	キャンプでいただきます（つちだよしはる作/絵, 小峰書店）	バーベキュー遊び（新聞紙やチラシ, 画用紙, 折り紙, 毛糸などを使った製作遊び）
3回目	おおきなかぼちゃ（S.D.シンドラ文, エリカ・シルバーマン絵, おびかゆうこ訳, 主婦の友社）	おばけパーティー（大型絵本）（ジャック・デュケノワ作, 大澤晶訳, ほるぷ出版）48p	新聞紙で仮装遊び（新聞紙を使って服やほうき, 羽などを作る製作遊び）
4回目	カレーだいおうのまほう（石倉ヒロユキ作/絵, ひさかたチャイルド）	ぐるぐるカレー（矢野アケミ作/絵, アリス館）	折り紙でオリジナルカレー作り（画用紙をお皿に見立て, 折り紙ちぎってオリジナルカレーを作る製作遊び）

## 2. 方法

### (1) 研究参加者

本研究は、市内のA幼稚園にご協力いただき、4歳児クラス（aクラス）の幼児19名（男児11名、女児8名）に対して絵本の読みあい遊びの活動を行った。aクラス保護者らには、事前と事後にアンケートを実施した。更にaクラスの担任に対してアンケートとインタビューを実施した。

### (2) 調査方法

aクラスでは2018年8月から同年11月までの計4回、朝のあいさつ後の9:30~10:20、保育室内で絵本の読みあい遊びを行った。はじめに、10分程度絵本の読みあいを行い、その後絵本の内容に関連した遊びを実施し、終了の10分前にまた絵本の読みあいを行った。絵本の読み手は、はじめの絵本については第二著者が一回目と三回目を第三著者が二回目と四回目を担当し、おわりの絵本は、第二著者が一回目から三回目を第三著者が四回目を担当し。読みあいで使用した絵本、絵本と絵本の間の遊びについては、表1の通りである。今回使用した絵本は、絵がはっきりとしていて遠くからでも見えやすいこと、遊びのテーマにあっていること、話が分かりやすく、声に出して読んでも5分ほどで読み終わることを条件に選定した。

本研究は、北海道教育大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施された（承認番号：北教大研倫2018043001）。

#### ①保護者へのアンケート調査

8月に子どもの本への興味・関心に関するアンケート（事前アンケート）を実施した。このアンケートでは年齢、性別、家族構成のほか、子どもに対して絵本を読む頻度、1回に読む絵本の冊数の平均、家に何冊絵本があるか、といった家庭での絵本の環境や絵本に対する子どもの態度、1日にどのくらいテレビを見るか、といった絵本以外の家庭での生活の様子などを訊ねた。その後11月に絵本の読みあい遊び実施後の子どもの本への興味・関心の変化についてのアンケート（事後アンケート）を行った。このアンケートでは、絵本の読みあい遊び取り組み後、家庭で子どもの絵本や本に対する態度が変化したかを訊ねた。

#### ②担任教諭へのアンケート調査

担任教諭へは絵本の読みあい遊びについての評価アンケート調査を行った。項目は、読みあい遊びの流れについて、絵本の読みあい遊びの教育効果をどう感じるか、絵本の読みあい遊びについて教育上適切だと思うか、読みあい遊びを実際教員が行う場合について、絵本の読みあい遊びについて気づいたことの4項目を設けた。

表2 発話内容の変化

	1回目	2回目	3回目	4回目
絵本に関する発話	17	48	22	77
関係のない発話	2	1	0	0
友達の発言への返答	0	1	2	2
読み手への発話	0	1	1	3
読み手の言葉の反復	0	0	2	2
質問	0	0	6	0
絵に関する発話	15	13	8	12

(3) 分析について

本研究では、aクラスでの読みあい場面と、アンケート調査の結果を分析した。読みあい場面の分析では、1台のビデオカメラで撮影したものを、子どもの発話量、発話内容、行動に分けて分析した。発話量については、発音が不明瞭で、複数人が口々につぶやいたものは発話とみなさず、発音が明瞭で発話内容が判断できるもののみを数えた。

行動については、並木(2012)の幼児の行動観察カテゴリーを参考に、笑う、指差し、身振り、他の子どもへの働きかけ(触る、顔を見合わせる)に分類した。発話内容についても、明瞭に聞き取れるものを文字に起こし、絵本のストーリーに関すること、絵に関すること、自身の経験に関すること、読み手の問いかけに関することに分類した。アンケート調査については、項目ごとに分析し、事前と事後の子どもの絵本への向き合い方の変化について分析した。

3. 結果

(1) 子どもの発話量と発話内容

①発話量の推移

子どもの発話量の推移について、最初の絵本の発話量を図2に、おわりの絵本の発話量を図3に示した。「自発的な発話」とは、読み手の促しや問いかけがなく、子どもが絵本や自身の経験をもとに発した言葉とし、「読み手の問いかけに対する発話」とは、読み手が子どもに向かって投げかけた質問や言葉に対しての受け答えとなる言葉と

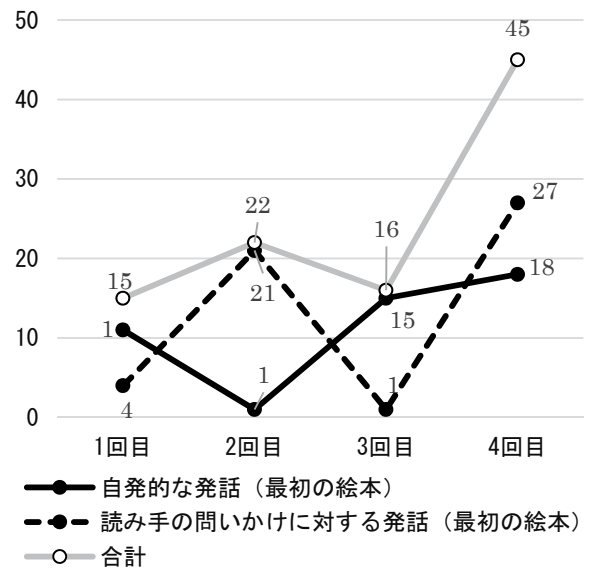


図2 最初の絵本で比較した発話量の推移

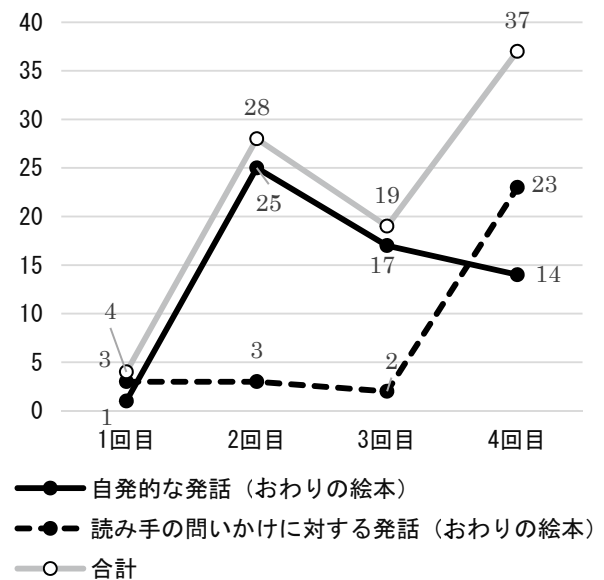


図3 おわりの絵本で比較した発話量の推移

定義した。最初の絵本とおわりの絵本それぞれで見ると、問いかけに対する発話が多いときは自主的な発話が減少した。

②発話内容

子どもの発話内容をカテゴライズし、絵本に関する発話が多くなれば子どもたちの絵本への興味・関心が絵本に引き付けられているとした。発話内容については、自発的な発話と読み手の問いかけに対する発話の内容に焦点を当て8項目に分けて分析した(表2)。「絵本に関する発話」は絵本の絵または内容に関する発話、「関係のない発話」は絵本の絵にも内容にも全く関係のない発話、「友達の発言への返答」は子どもが発話した内容を受けて他児が返した発話、「読み手への発話」は「わかってたよ」「もっと」など読み手が発した問いかけではない言葉に対する発話、「読み手の言葉の反復」は読み手の言葉や、絵本の文を読んだ発話、「質問」は絵や内容に対して子どもが問いかけた発話、「絵に対する発話」は絵本の絵に描かれているものへの発話をそれぞれ数えた。

3回目で絵に関する発話が減少したときに、質問の発話が増加している。4回目では、読み手への発話、読み手の言葉の反復、子どもの意見が増えている。絵本または絵本の読みあい活動に関係のない発話は、2回目まで見られたが、3回目以降は見られなかった。読み手の言葉の反復は3回目以降見られた。

(2) 読みあい時の子どもの行動

読みあい時に見られた子どもの行動について、指差し、立膝、見立て、接近、笑う、読み手へのスキンシップ、読み手への働きかけを絵本の内容理解、絵本への興味・関心、絵本を楽しんでいることを表す指標として「絵本に対して積極的な行動」とした。それに対して、立歩き、たたく、ビデオカメラを見る、あくび、寝そべり、退出を絵本に興味・関心のない行動、絵本への集中力が散漫になっている状況ととらえ「絵本に対して消極的な行動」とした。それぞれの行動の生起回数

を図4示す。隣の子を見る・話す・触るなどのスキンシップを「友達とスキンシップ・見る」、読み手へのスキンシップ・働きかけを「読み手へのスキンシップ」とし、それぞれの行動の生起回数を図5に示す。

どの回でも最初の絵本ではあくび、立歩き、ビデオカメラを気にするなど絵本に注視していない様子が目立ったが、おわりの絵本ではそれらの行動が減少した。最初の絵本とおわりの絵本が始まる前の、読み手と子どもたちの距離にも違いが見られた。最初の絵本では読み手と子どもたちの間に人1人分以上のスペースがあったが、おわりの

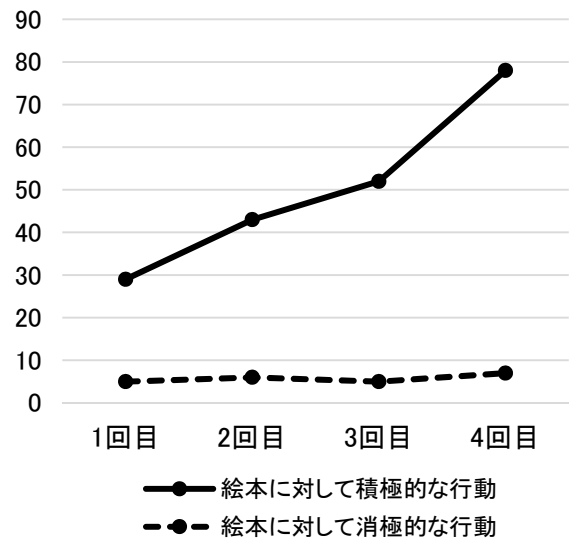


図4 絵本に対する積極的/消極的な行動の生起回数の推移

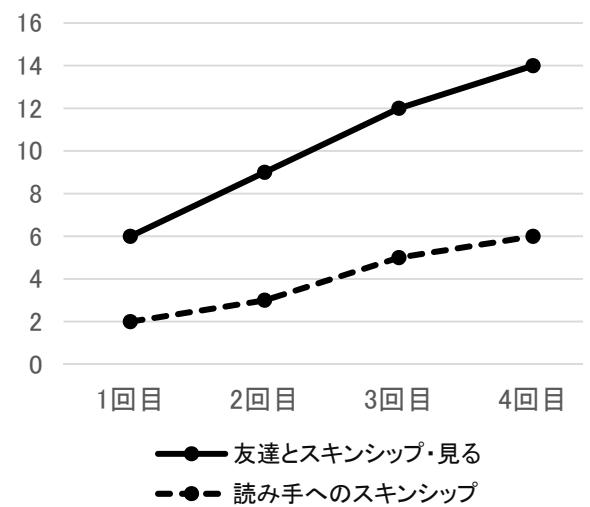


図5 友達または教師へのスキンシップ行動の生起回数の推移

絵本では、子どもたちは読み手の足元に集まり、読み手との間にスペースがない状態だった。見立ての回数が多い回では読み手への接近が増加した。回数を重ねるごとに、子どもが近くの子どもの顔を見る回数が増加した。

### (3) 保護者アンケートの結果

#### ①事前アンケート結果

子どもの本への興味・関心に関する事前アンケートはA幼稚園のaクラスの保護者19名から得られた。まず子どもに対して絵本を読む頻度については、毎日と答えた保護者が4名、週3回以上は9名、週1～2回が4名と、aクラスの幼児は日常的に絵本を読む習慣があるといえる。1回に読む絵本の平均冊数の平均を問うたところ、1冊が5名、2冊が8名、3冊以上が4名と、一度に複数冊の本を保護者が読んでいることが窺い知れる。家に何冊絵本があるか、という問いに対しては、20冊未満が4名、30冊未満が2名、40冊未満が3名、50冊未満が4名、それ以上が5名であった。加えて、幼稚園や図書館で月に何冊絵本を借りるか、との問いには、10冊以上が2名、5冊以上が7名、3冊から5冊が1名、1冊から2冊が3名であり、ほとんど借りないとの回答は2名で、年に数冊というのも3名であった。子どもが自分から本を持ってきて読むように頼むかを訊ねたところ、いつもそうだと答えたのが9名で、大概そうだと答えたのが6名であった。子どものお気に入りの絵本については、多様な回答が得られたが、「おしりたんていシリーズ」と「ノントンシリーズ」が最も多く、各4名であった。

#### ②事後アンケート結果

絵本の読みあい遊びの実施後の子どもの本への興味・関心の変化についての事後アンケートは、読みあい遊び実施後にaクラスの保護者のうち17名から得られたものである。まず、子どもの絵本を読む頻度は変化したか、の問いについては、少し増えたが5名、変わらないが9名、少し減ったが3名であった。子どもの絵本の好みに変化があったか、との問いには13名の保護者が変わらな

い、と答えていたが、変化があった、と答えた保護者は、ストーリー性のあるものを好むようになった、以前は動物など写真を見るようなタイプの本が多かったが、今はストーリーを楽しむような本を選ぶ機会が増えた、以前より幅広いジャンルの絵本を読むようになった、続きのある話を選ぶようになった、といった変化が見られた。絵本の読む頻度や幼稚園での読み聞かせの話をするか、といった質問に対しての変化はあまり見られなかった一方で、半数の保護者が絵本を読んでいる際、子どもの発言が増えたと回答しており、70.6%の保護者から子どもの絵本に対する興味・関心が上がったという回答が得られた。子どもの変化・保護者の気づきとして、10名の保護者が子どもの絵本に対する向き合い方の変化を感じていたと示された。

#### (4) 教師アンケートの結果

A幼稚園aクラスの担任教諭1名による、絵本の読みあい遊びについての評価アンケートの回答では、読みあい自体の構造、およびその教育的効果については「どちらとも言えない」という評価であった。感想では「教師側に伝えたいイメージがあってそのために絵本を読んで遊んでいくと子どもたちとイメージの共有が強まるように感じました。また絵本のあとに好きな遊びを行うとイメージを強く持っている子は遊びにも反映していたので今後の保育にも生かせるなと思いました。」といった、肯定的な評価が得られた。

## 4. 考 察

本研究では、A幼稚園の保育場面における「絵本の読みあい遊び」の実践を通して、読みあい場面での子どもの発話・指差しなどの言動を分析し、読みあい遊びを行うことで子どもの絵本に対する向き合い方は変わるのかを検討した。その結果、自発的な発話量については、最初の絵本およびおわりの絵本共に初回よりも実施するに従って増加が見られ、発話内容も絵本に関する発話が



きく増えたほか、子どもの意見も見られるようになった。それに伴い、絵本に対する積極的な行動が増加し、対人へのスキンシップ行動も回を追うごとに増加が見られた。これらの量的な評価だけではなく、質的にも肯定的な変化が認められた。わずか4回の実践であるが、本研究の結果から「絵本の読みあい遊び」は、子どもの絵本に対する行動を積極的にさせ、より興味を引き出すといった肯定的な方向へと変化させたことが示唆された。

発話量の分析では、最初の絵本とおわりの絵本それぞれで見ると、問いかけに対する発話が多いときは自主的な発話が減少した。全体を通してみると、1回目と4回目では、発話量の合計が4.3倍増加し、3回目では発話量の合計は減っているが、自発的な発話は2回目に比べて増加した。このことから、読み手の働きかけが少ないときは、子どもの自主的な発話が増加することが読み取れる。発話量の増加は、それ自体積極的なコミュニケーション行動として位置づけることができる。最初の絵本とおわりの絵本では発話量自体に大きな差はないが、おわりの絵本では自発的な発話が増えている。1回目と4回目の発話量の合計を比べると、4倍以上発話量が増えていた。子どもの自発的な発言も増えているが、4回目では読み手の問いかけに対する発話がより増えている。その理由として考えられるのは、aクラスでは読み合い遊びの数日前に実際にカレー作りを行っており、内容が子どもたちの経験と結び付いたこと、読み手との面識を重ね、警戒心が解けたこと、読み手が絵本の読み合いに慣れ、子どもに問いかけたり、子どもの発言を拾ったりし、子どもの発話を促す余裕が持てたことが考えられる。これらのことから、絵本と絵本の間に関連した遊びを行うことで、終わりの絵本の内容と自身の経験を照らし合わせることができ、絵本に対する自主的な発言が動機づけられたと考えられる。

発話内容は、1回目と2回目で絵本に関係のない発話が見られたが、3回目以降は見られず、絵本に関する発話が増加した。3回目では、他の回に比べ絵本に関する発話そのものと、読み手の問

いかけが少なかった一方で、子どもの自発的な発話が前回より増加している。その発話内容も、絵本に関しての質問や読み手への発話、意見などが多く、子どもたちがより絵本の世界に集中していたと考えられる。

絵本の読みあい中の行動については、最初の絵本とおわりの絵本が始まる前の、読み手と子どもたちの距離の違いが見られた。最初の絵本で見られたあくび、立ち歩き、ビデオカメラを気にするなどの様子がおわりの絵本では減少しており、絵本に関連した遊びを行ったことが絵本への興味に繋がったと考えられる。全体を通して指差しや接近に回数を重ねるごとの変化は見られなかった。見立ての動作として、「食べる動作」「カレーを混ぜる動作」が多かった。これは、「食べる」ということが日常的に毎日行う動作であり、どの子どもも再現しやすい動作であったこと、数日前にカレー作りを行ったため、その体験を思い出しやすかったと考えられる。隣の子の顔を見る回数も回数を重ねるごとに増えており、読み手と子どもたちの間だけでなく、子どもたち同士の関わりも増えたことが分かった。

こうした回数を重ねるごとに認められた発話量の増加や発話内容の豊かさは、絵本の想像世界とその想像世界と関連する遊びという、現実世界を相互に体験し合うことで生まれたものと考えられることができるだろうか。Strouse et al. (2018) は、子どもは絵本を介して現実の物体と絵本の中のイメージの違いを知り、現実世界と空想世界2つの領域があることを認識する、としており、その際子ども自身の経験と既存知識が必要となることから、絵本は内容と自分の住む世界を照らし合わせることを通じて、象徴機能と理論の類推機能の発達をもたらすと述べている。絵本を読むことで、表情表出が増え、共感を示す発話が増えることが示されており(磯部・池田2002)、絵本を読む際には、読み手である子どもが絵本の登場人物と自分の体験を重ね、共感することによって発話や表情表出、他者の心情理解に繋がると考えられる。絵本はまさに石川(2009)が述べているように、

子どもの認知発達を促す最近接領域であり、実際に遊びとして体験することで、イメージをよりリアリティのあるものとして昇華し、より主体的な行動が出やすくなったと考えられる。

事前アンケートから、aクラスの幼児および保護者の絵本の関心の高さが示されている。68%が週に3回以上読み聞かせを行っており、半数以上が1回に平均2冊以上絵本を読み、子ども自身から本を持ってきて読むように頼むことも多いことから、幼児も比較的積極的に絵本を求めている。このことから、保護者が読み聞かせをする時間を設けており、aクラスの多くの幼児は絵本には恵まれている環境にあるといえ、幼児も絵本の関心が高いことがうかがえる。幼児の79%の子どもが習い事をしており、所得が一定水準を上回っている家庭が多いことが要因として考えられるだろう。

こうした点を踏まえて事後アンケートを見ると、本を読む頻度が「少し増えた」と回答した5人のうち4人は、事前アンケートで、絵本を週3～4回以上読む、「たいがい」または「いつも」自分から読んでほしい絵本を持ってくる、と答えた保護者であった。この4名はもともと絵本の関心が高かったと考えられる。残りの1名は、事前アンケートで絵本を読む頻度は月に数回で、絵本を図書館や幼稚園でもほとんど借りない、という回答であったことに加え、8月以降保護者に読み聞かせをしており、「入園して初めて幼稚園の絵本を借りたいといった」「家で下の子に絵本を読んであげる姿が以前より増えた」ということから、子どもの絵本への興味が以前より高まったと考えられる。絵本を読む頻度や、絵本への興味が「変わらない」と回答した保護者の中にも、肯定的な気づきを得られていた。子どもの変化についても、単に自分で絵本を読む、または保護者に読んでほしいと頼むだけでなく、兄弟で読み合ったり、自分で絵本を作ったり、主体的に絵本を読むようになったことがわかった。絵本の読みあい遊びを通じて、絵本を読む際に相手意識を持ち、一緒に読み合うことの楽しさ、遊びの中に絵本や絵本の世界を取り込む楽しさ、絵本をただ読んだり聞いた

りする以外の楽しさなどを子どもが見出したと考えられる。

aクラスの担任教諭のアンケートからは、保育として「読みあい遊び」を取り入れることの難しさと課題についての回答が得られた。幼稚園教育指導要領では、幼児教育の5領域のうち、言葉の内容の部分で「絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像をする楽しさを味わう」内容の取り扱いの部分で「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージを持ち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」とある。読み合い遊び自体はこの言葉の内容に即していると考えられるが、子どもたちが絵本の読み合いで感じたことや気づいたことを遊びの中で発想として生かせる工夫が必要であったと考えられる。aクラスでは絵本への興味・関心が高い子が多かったが、そうではない子をどのように活動に巻き込むか、絵本場面でどのような読み合い方をするかなど、子どもの実態や興味に合わせたアプローチの必要性が示唆された。

最後に本研究の課題と展望を挙げる。まず一点目は発話量の増加が全ての子どもに必ずしも認められなかったという点である。全ての幼児の発話量や積極的なスキンシップ行動が増加したわけではなく、一部の子どもについては発話や積極的な行動があまり変化しなかった幼児も存在する。だが、こうした幼児においても何らかの変化は認められたかもしれない。質的な評価に加え、さらに回数を重ねることによって変化が見られるかどうかについて、発達の問題なども含めて検討する必要がある。本研究で行った絵本の読みあい遊びは、特に発達に課題を抱えた子どもに対しての効果も報告されていることから(石川ら, 2018)、今後多様な子どもに対する実践が行われることで、有効な発達支援法としての「絵本の読みあい遊び」が普及・発展することを期待したい。二点目として、本研究では読み手のスキルは重要であり、読みの熟練度が結果に影響を与えかねない点であ

る。事前にトレーニングをしたとはいえ、実際のところ読み手のスキルは回を重ねるごとに向上しており、こうした要因が子どもの絵本に対する積極的な働きかけに繋がった可能性は否定できない。こうした問題は実践研究においては避けられないものであろうが、これらの問題を考慮しても、双方向のコミュニケーション行動が促進され、絵本に対する興味関心が広がった幼児がいる事実を否定されるものではない。最後に、読み手と聞き手の関係性についてである。間違いなく回を追うごとに良好な関係性が構築されていったのは事実である。第1回目は、子どもたちが活動の様子を把握していなかったこと、読み手と子どもたちが初対面であったことが、発話量に影響したと考えられる。子どもたちが読み合い遊びのスタイルに慣れ、活動の流れを把握してからの方が発話は促されやすかったと考えられる。

## 研究・文責分担

本研究のデータと論文の一部は、第一著者の指導の下で、平成30年度北海道教育大学旭川校に提出された第二著者と第三著者の卒業論文として発表されたものを大幅に修正して再構成したものである。本論では、第一著者が責任著者として研究デザインと論文執筆およびデータの収集を行った。第二著者は論文の一部執筆（方法、結果および考察の一部）とデータの解析、第三著者は第二著者と共にデータの解析と読み合い遊びの実践を行った。第四著者は研究へのコメントと研究デザインの大枠を担当した。

## 謝 辞

本研究を実施するにあたり、A幼稚園のaクラス園児並びに保護者の方、そして園長、aクラスの担任の先生にご協力を頂いたことを心より感謝申し上げます。本論は、日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究（B）課題番号19H01695）の助成を受けて執筆されました。

## 引用文献

- 秋田喜代美・無藤隆（1996）. 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討. *教育心理学研究*, 44(1), 109-120.
- Strouse, G.A., Nyhout, A., & Ganea, P.A. (2018). The role of book features in young children's transfer of information from picture books to real-world contexts. *Frontiers in Psychology*, 9, Article 50, 1-14.
- 古相正美・岡本満江（2017）. 保育園・幼稚園に通う乳幼児の家庭における絵本読み聞かせの実態. 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 49, 25-34.
- 石川由美子（2009）. 子どもの認知発達を促す最近接発達領域を生み出す「場」としての絵本についての一考察. *聖学院大学論叢*, 22(1), 165-179.
- 石川由美子・水谷勉・仲野みこ・齋藤有（2018）. 絵本の読み合い遊びが育てる大人と子どもの「関係」発達—その実証的検討—. *宇都宮大学教育学部研究紀要*, 68, 73-84.
- 磯部陽子・池田由紀江（2002）. 絵本読み場面における幼児の情動認知の発達. *心身障害研究*, 20, 33-44.
- 公文教育研究会（2015）. 0～3歳児と母親に関する意識と実態調査. <https://www.kumon.ne.jp/kumonnow/topics/vol098/>（2019年8月26日閲覧）
- 文部科学省（2018）. 『第四次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画』. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/30/04/1403863.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/04/1403863.htm)（2019年8月26日閲覧）
- 村中李衣（2005）. 『絵本の読みあいからみえてくるもの』. ぶどう社.
- 並木真理子（2012）. 幼稚園における絵本の読み聞かせの構成および保育者の動作・発話が幼児の発話に及ぼす影響. *保育学研究*, 50(2), 75-89.
- Masataka, N. (2014). Development of reading ability is facilitated by intensive exposure to a digital children's picture book. *Frontiers in Psychology*, 5, Article 396, 1-4.
- 諸井泰子（2011）. 子どもへの絵本の読み聞かせに対する母親の意識と育児観の関連. *有明芸術教育短期大学紀要*, 2, 43-53.
- Phillips, L.M., Norris, S.P., & Anderson, J. (2008). Unlocking the Door: Is Parents' Reading to Children the Key to Early Literacy Development? *Canadian Psychology*, 49(2), 82-88.
- 齋藤有・内田伸子（2013）. 幼児期の絵本の読み聞かせに母親の養育態度が与える影響：「共有型」と「強制型」の横断的比較. *発達心理学研究*, 24(2), 150-159.
- 佐藤鮎美（2017）. 絵本遊びが親子関係に良い効果をもた

らすのは本当か？ ベビーサイエンス, 6, 18-27.

(片桐 正敏 旭川校准教授)

(長谷川茉奈 旭川市役所)

(福本 那奈 旭川市立神楽岡小学校教諭)

(石川由美子 宇都宮大学准教授)

